

# 幼児の蝶の理解と名称の分化過程

桑 原 昭 徳

Understanding of Child's Butterflies and Deviding Process of Their Names  
Akinori KUWAHARA

1993.11.19 受理

キーワード：園外保育、散歩、蝶

## 1. はじめに

M児は1987年9月26日生まれで、山口市在住の男児である。現在も継続しているM児と筆者の「散歩」の第1回目は、4日間のインターホン遊びという予備過程を経て1991年5月24日からはじまった。その日M児は散歩の過程で、歩くこと以外に次の3つの活動をした。①池の水面近くにいた2匹の錦鯉を見たこと、②畦道に転がっていたホースの切れ端を水田の中に突っ込んだこと、③筆者の作った笹舟を溝に流して後を追ったこと、であった。M児が3歳8か月を迎えようとする初夏のことであった。

それ以来、現在も日常的に散歩は続行中であるが、散歩を開始して2年半後の1993年11月7日現在では、毎回ほぼ同じ散歩コースを、のべ200回ばかり一緒に歩いたことになる。(1)

幼児にとっての散歩は、歩くといった身体的な活動であるばかりではなくて、周囲の事物を手にもって見たり探索したりとの総合的な活動である。本論では、M児との約200回にわたる散歩活動の中から「チョウ」にかかわるM児の活動に焦点をあてることによつて、幼児の具体的場面での「チョウの理解」とチョウの名称の分化の過程を明らかにする。それとともに、「わかる」ということの過程と構造にも言及したいのである。

## 2. チョウのすべてが「チョウチヨ」(1991.8.31)

M児宅と拙宅の境から約10m進んだところに散歩道の入り口がある。片道65m、幅50cmばかりの細い畦道を歩く。こんな形の散歩が始まって40日目、15回目の1991年7月3日の散歩から、虫とり網という「道具」がくわわった。それまでは、ただ歩くことを中心としていた散歩に、虫とり網という「物」が入り込むことによって、最初の変化が見られはじめたのであった。その契機は、M児・兄N君(当時小学5年生)・筆者の3人が小雨の中を散歩しているときに、散歩コース入口の溝で「ドンコ」というハゼ科の魚を見つけたことであった。さっそくN君が溝に入り、持っていた傘を逆さにして捕獲を試みたが、取り逃がしてしまった。3人が共通に目撃することになったドンコを捕りたいというのが、散歩に網を持っていくことになったきっかけであった。M児が3才9カ月のときであった。たしかにきっかけは魚取りであったが、その後、M児がこの網で魚をとったことはない。M児が自らの力で魚やチョウ・トンボなどを捕獲することはなかったが、この網は散歩活動を活性化する大事

な物（用具）となった。(2)

網でトンボやチョウを捕獲することは3才児にはむつかしい活動である。まず静かに獲物に近づくこと自体がむつかしく、獲物と網の距離を合わせることに、さらにタイミングを見計らうことなどは、いっそう困難なことであった。だから、M児が網を持って散歩に出かけ、身近に止まるチョウやトンボの捕獲を何度も試みるのだが、ほとんど捕ることはできない。多くの場合一緒に散歩する筆者が、時には2人の兄たちが、チョウやトンボを捕獲して、いったん網に入った獲物をM児が手で摘まむことになる。

網を購入する契機となったドンコを再び目撃することはできなかった。また、散歩をはじめ以前には棲息していたメダカもその姿を認めることはできなかった。それまで文字通りの「土手」に挟まれて流れていた溝が、セメント製の溝に作り替えられたからである。

1991年7月1日、M児の母親は男ばかり3人兄弟に各自専用の同じ虫とり網を買い与えた。M児が最初に網をつかって捕ったものは、じつは「チョウチョ」であった。自分専用の網を使い始めて59日が経過する日のことであった。

8月31日、M児は自分の手で網をにぎり、散歩コース入口付近の草むらでとうとう1匹のチョウを捕獲したのであった。そのときM児は「はく、チョウチョとりの名人になった」と、その喜びを表現した。そのチョウは灰褐色のジャノメチョウであったが、M児にとっては「チョウチョ」であった。

ジャノメチョウとは「蛇の目蝶」と書く。つまり「蛇の目の模様をしたチョウ」という日本語の名称が付けられているのである。この種類のチョウの羽には、あたかも「ヘビの目＝蛇の目」に似た丸い斑点が模様としてついているのである。だから筆者も「ジャノメチョウ」という名前をおぼえていたのであった。夏のおわりに多数飛んでいたのは、正確にはヒメジャノメであった。このヒメジャノメは、日陰や草むらに棲息していて、茶褐色の色は目につきにくい、ヒョウモンチョウやアゲハのように高いところを遠くまで飛ぶことはなく、地面ちかく飛ぶばかりではなくて、小刻みに止まる。だから幼児にとっては比較的捕獲しやすいチョウである。

当時3才11か月のM児にとって、あたかも2枚の薄い紙のような羽をつかってヒラヒラと舞うように飛ぶものは、すべて「チョウチョ」であった。散歩の中に初めて網が加わってからM児が自分の力で「チョウチョ」を捕獲するまでには、およそ15回の散歩を体験している。その中では筆者や兄たちが捕獲してM児が手に持つといった体験を何度も繰り返している。手にもつチョウが、こげ茶色であっても、白色であっても、黄色であっても、M児にとっては、すべて「チョウチョ」という単一の名前で呼ばれてきたのであった。

ちなみにM児も使っている「チョウチョ」という名称は「チョウ（蝶）」から派生しており、正しくは「ちょうちょう」と発音し、漢字では「蝶々」と書くべきであろう。しかし「ちょうちょう」の歌にもあるように、子どもはもちろんのこと、日常的には社会一般において「ちょうちょう」と言い習わされている。本論でもM児が使う言葉についてはそのまま「チョウチョ」と書き表わすことにする。

漢字の「蝶」の右半分の旁には、もともと「薄い」という意味がある。薄い魚が「鱧」であり、草冠（植物）の薄い部分は「葉」であり、文字を書く薄い木札が「牒」である。同じように薄っぺらの虫が「蝶」なのである。ということは、M児が初めて自分の力で「チョウ

チョ」を捕るまでも、見たり追いかけてたり触れたりしてきたチョウの仲間を、ほかの小動物や昆虫とは区別して、間違いなく「チョウチョ」と言葉化したことは、3歳から4歳にかけての子どもも「抽象化」という知的行為を何気なく行っていることの証拠となる。身近に見かけることになるトンボやクモやハチなどの多種多様な生き物の中からチョウの仲間を「分けとって」、実際には多様な色・形・大きさのチョウの仲間を「チョウチョ」という上位の概念で表現していることになる。

同じ時期、この散歩コースを大人の目で観察すると、次のチョウを見ることができた。散歩を始めて1か月経過した6月23・24日のM児との散歩と、25日午後の30分間の大人の目で観察した結果、蝶類については次の4種を観察することができた。当時のメモの言葉をそのままあげる。

- ・モンシロチョウ（最も多く見られたチョウであるが、当時はまだスジグロシロチョウと区別されていない）
  - ・茶色のチョウ（後に判明するのであるがヒメジャノメである）、
  - ・青色の小型チョウ（同じくヤマトシジミである）、以上M児との散歩途上。
  - ・アゲハチョウ（アゲハチョウはアゲハ類の総称で、正しくはアゲハのようである）(3)、
- そのうち、モンシロチョウ、ヒメジャノメ、ヤマトシジミの3種については、のちの散歩の機会に簡単に捕獲できたので、何度もM児の手に触れることになった。アゲハについては飛ぶスピードも速いので、なかなか捕獲が困難であった。

初めてM児がチョウを捕獲して1週間後の9月7日の散歩の時のことである。ヒメジャノメを自分の手で捕獲したことは印象に残ったらしく、M児および兄のH君（小2）との3人の散歩においては、1週間前にチョウを捕獲した場所に来ると、M児は「はくも名人になったよね、灰色のチョウチョ取ったから」と言った。この言葉は、その後も、同じ場所にさしかかると何度か繰り返されることになった。

9月22日、小2の兄H君とM児との散歩では、筆者がモンシロチョウ・モンキチョウ・アゲハを捕獲した。H君とM児は網の中に手を入れ、チョウを自分で取り出して羽をつまんだ。

### 3. 「変わったチョウチョ」の出現(1991.9.30)

1991年9月30日、散歩中のM児が「あっ、変わったチョウチョ！」と叫んで、茶色のチョウが飛んでいくのを指さして教えてくれた。M児は「変わったチョウチョ」という言葉を2回繰り返した。そのときのチョウの様子からヒヨウモンチョウの仲間であることはわかったが、後に捕獲して調べた結果、ツマグロヒョウモンであることが判明した。この時点で、自分が捕ったチョウとも違い、日ごろの散歩の中で手に取ってきたモンシロチョウ、シジミチョウとも違うチョウが意識しはじめられたのである。

11月3日、M児、小2のH君、筆者との3人の散歩の中で、M児は草むらを飛んでいるヤマトシジミを見つけた。M児は「H君、チョウチョがおるよ」と話しかけた。そのあとモンシロチョウを見つけて、M児は「H兄ちゃん、チョウチョがおった、捕まえて」とも言った。この時点では、ヤマトシジミもモンシロチョウもチョウチョという言葉で表現されている。

11月に入ると夕方の暮れ方は速い。M児が保護者と帰宅する時刻には、すでに暗くなっており、散歩の回数は平日の夕方の散歩はできなくなる。そして、ふたたびチョウ類がM児の目に触れるのは年を越して暖かくなってからのことになる。

初冬を迎えると、散歩道にチョウの姿は見えなくなる。それでもチョウに関係する活動が見られることがある。

1992年12月28日の午後、車での外出から帰ってきたM児が、自分の家に上がらずに、車から降りてそのまま筆者の家に上がり込んだ。テーブルの上に置いてあった「昆虫図鑑」を見つけて開きはじめた。

M児が「トンボの本にもチョウチョが載っとるんじゃないね」という。それまで主としてトンボを調べてきたので、「昆虫図鑑」を「トンボの本」と言ってきたM児である。そのトンボの本に「チョウチョ」が載っていたことは、M児にとって新しい発見に属することなのであった。

さらに「トンボを見つけよう」と言ったあと、「トンボのめがねはピカピカめがね、青いお空を見てたから、見てたから」と歌いながら、しきりに図鑑をめくる。「トンボがあった」といって、シオカラトンボを探した。「おじちゃん、これがシオカラトンボ?」と尋ねる。

つぎに図鑑の中の「セミの抜け殻」を見つけて、「セミの抜け殻があったよ。セミの抜け殻も違うんじゃないね。なんで違うん?」とたずねる。M児に促されて図鑑を見ると、4枚の写真が載っている。アブラゼミ、ヒグラシ、ニイニゼミ、ハルゼミの抜け殻は、色も形も大きさも違うのであった。(4)この図鑑が後に、大きな力を発揮するのである。

(4) 深谷昌次監修「学研の図鑑 昆虫」学習研究社、1970、75ページ。

#### 4. 再び「チョウチョ」(1992.4.19)

1992年に入って筆者が散歩道で初めてチョウを目撃したのは4月11日のことであった。この日の2回目の散歩の中で初めてモンシロチョウが舞っているのに気付いた。散歩道とは離れた田んぼの上をモンシロチョウが5匹ばかり舞い飛んでいる。そのとき、数匹のツバメが田んぼの表面を撫でるように旋回した。そのあとよく見ると、モンシロチョウの姿は見えなかった。自然の厳しい掟である。もちろん、M児がこのことに気付くことはなかったが、この日すでにモンシロチョウはいたのである。

4月18日(土)、この時期すでに散歩道の東側にある池の土手にワラビが出る。この時期の散歩はもっぱらワラビとりが主な活動となる。大人の筆者の目から見ればモンシロチョウ、ヒョウモンチョウ、シジミチョウなどもいるのだが、M児との散歩の中では話題にはならない。

翌19日の日曜日には、M児とともに小2の兄H君も加わって3人が散歩をする。その散歩では兄のH君がヒョウモンチョウ、シジミチョウ、イトトンボ、ハチ(蜂の巣も)、ミズスマシ等を見つける。土手の上から池の水面を見ると甲羅の直径が5cmばかりの子ガメが水面を泳いで池の中央の方向に逃げていく。子ガメは水中に潜らずに水面を泳いで遠ざかっていく。しばらくこの様子を見ていたM児は「取りたいなあ」と声に出した。そのあと、M児は目の前を飛んでいくモンシロチョウを見つけて「あっ、チョウチョ。チョウチョ」と、一緒

にいた私たちに教えてくれた。M児にとって、これが春を迎えて初めての「チョウチョ」であった。

この年の5月1日付で筆者の内地留学が始まるということもあって、散歩の回数は極端に減った。しかし帰宅の折にはM児との散歩を心掛けた。

1992年8月13日の午前の散歩では、M児と小2のH君との3人で散歩にでかけた。この散歩でH君がツユクサを見つけた。M児は私の方に「ねえねえ、どこにあった？、青い花」と尋ねてくる。その間にもH君は2～3本のツユクサを探っている。散歩コース入り口近くでツユクサを見つけて、M児も3本ほど青紫色の花を手にする事ができた。

このツユクサを使って絵を描こうということになったのである。絵を描くといっても、白いメモ用紙を半分に折ってツユクサの花びらをはさみ、上から手で擦ったり叩いたりして色素を染めつけるという手法である。

最初に筆者がやって見せた。そのようにして作ったM児の3枚目の作品は、M児の言葉では「チョウチョ」になった。偶然にも織り目の部分もつながって対照的な模様ができあがり、あたかもチョウが羽ばたいているように見えたのであった。

## 5. 「黄色いあれ」・「シジミチョウ」(1992.8.26)

### 1) 「黄色いチョウ」

1992年8月26日、M児の「ねえねえ、おじちゃん、散歩に行こう」という声に誘われて出かけることになる。この日も網を持って出かけようとするが、1年間も使ってきた網は、針金の枠からはずれて使えない。そこで簡単に修理して出かける。

この日、散歩コースを歩いていて、目の前を通りすぎて飛んで行ったチョウは、アゲハ、ヒメジャノメ、クロアゲハ、ツマグロヒョウモンであった。これらのチョウには網が届かない。しかしどうにかモンキチョウを探ることができた。筆者が捕獲したときM児は「黄色いあれが、ついに！」と言ってくれた。名前はわからないが「黄色いチョウがついに採れた」と言うのである。

### 2) シジミチョウ

同じ8月26日にはアゲハを探ることもできた。アゲハを手を持ったM児は「内側、ハンコみたい」と言った。はっきりとした意味は不明であるが、ハンコ(判子)で押したようにはっきりとした模様という意味であろうか。逃がしたあと「あれは、元気がいい」といった。この日、穴のある網を振り回してM児は足もと近くを飛ぶヤマトシジミをしきりに追っている。採れたという手応えがあったからであろうか、草の上に網を伏せて「どこへ行った？シジミチョウ」と私に尋ねた。この時点で「シジミチョウ」という名称が筆者の前で初めて使われたのであった。

11月14日、M児と散歩した。筆者の「トンボがないねえ」という呼びかけに、M児は「もう死んだんじゃろう」と応答した。コスモスの花を摘み、ズボンについた「くつつきもんもん(ヌスビトハギの実)」を取り除いたところで、「あっ、チョウチョ、？シジミチョウ、網もってくるから」と家に網を取りに帰っていった。

モンシロチョウも2匹捕獲する。

チョウの季節が終わった。再びチョウが散歩中のM児の前に現われるのは、春が来るのを

待たなくてはならなかった。

## 6. 「モンシロチョウ」(1993.3.21)

1993年3月21日、モンシロチョウが飛び始めた。それを見るとM児は「捕ってみようか」と言って、自分で網を持って捕獲を試みる。逃げられてしまう。

M児は「このこと（モンシロチョウがいること）、H兄ちゃんに知らせよう、帰ったら」という。

池にいたシラサギが飛び立って飛んでいく。そのときM児は「モンシロチョウと同じ方向に飛んでいったね」といった。M児は「モンシロチョウ」という名称を使うことができたのであった。

その日の散歩の帰り道で、もう一度モンシロチョウが舞っているのを目撃することになる。そのときも「あっ、モンシロチョウ！」と叫んだのであった。

## 7. モンシロチョウとモンキチョウの区別(1992.4.17)

これまで、モンシロチョウとは明らかに大きさの違うジジミチョウ（厳密にはヤマトジジミ、以下同じ）との区分はできていたが、M児にとって、黄色も含めた白っぽいチョウは、すべてモンシロチョウであった。しかしながら4月中旬になってモンシロチョウとモンキチョウの区別がわかることになったのである。そのきっかけは次のような場面のできごとであった。

1993年4月17日、拙宅の勝手口にすわって、M児の目の前でネットのはずれた網を繕う。黒糸で網の縁を針金の部分に巻きつけて修理する。池の南側の土手下の田んぼにはところどころにレンゲの花が咲いている。そのうえを、モンシロチョウが飛んでいる。ここそこに10匹くらいが飛んでいる。筆者はさっそくM児の目の前でチョウを捕る。

第1回目、M児が網のなかのチョウを、親指と人差し指でつまむが、羽の先端をもっている。M「ほら、花粉がついとるじゃろう」と言ったとたんに、羽の先端がちぎれて、すぐに逃げてしまう。

2匹目は、捕獲するときにチョウが網の縁にあたって、弱ってしまっ、あまり飛ばない。すぐに逃がす。M児は「ここで待ちよって、虫を入れる籠をもってくる」と言い残して自宅に引き返し、プラスチック製の虫かごを持ってくる。

3匹目を網でとる。M児は「モンシロチョウかね」といいながら、網の中に手を入れて羽をつまむが、「あっ」という声、これまた逃げられてしまう。しかしその直後に、M児は「あきらめちゃいかん」と言う。

4匹目、やっとカゴの中に入れる。そのとき、すでに蝶の羽の中央あたりをもつことができていた。チョウを指先で持つという行為も何度か実際の経験を重ねれば簡単に習熟することが可能である。

最初のうち見える範囲で10匹ばかり舞っているチョウはすべてモンシロチョウであったが、そのうちに目の前を黄色の「モンキチョウ」が飛んでいく。どうにかして捕獲して、M児に見せてやりたいものと考えた筆者は、田んぼの中を追いかける。M児も「おじちゃん、そっと、そっと」と注意を与えてくれる。3度ばかり立ち止まってはあとをつけて、

やっと捕獲することができた。M児が網の中からモンキチョウを取り出すとき、筆者は「モンキチョウよ」と名前を言ってみるが、M児は、なおも「モンシロチョウ」と言う。そこで「これはね、黄色いから、モンキチョウ」と言葉に出して教えたと、M児は「モンキチョウ」と発音した。それに答えて、「そうそう、白いのはモンシロチョウ、黄色いのはモンキチョウ」とゆっくりと教える。するとM児は「モンキチョウ」という。この時点で、白と黄の色の違いに着目することによって、どうやらモンシロチョウとモンキチョウの区別はできたようだ。

M児の虫籠の中では、2匹のモンシロチョウとモンキチョウがさかんに飛んでいる。M児は虫籠を、自分の自転車のハンドル前につけてあるカゴの中に入れて、持ち帰ろうとする。

ちょうどそのとき、散歩コース脇にあるアパートの女兒（2才9か月）が、母親の腕に抱かれて帰宅するのに出合った。この女兒は後にM児との散歩に加わることになるのだが、そのころM児と私の間で「かわいい女の子」と名付けていた女兒である。筆者は「M君、かわいい女の子が帰ってきたよ。見せてあげてよ」、そのあと「名前も教えてあげてね」と言うと、M児は「黄色いのがモンキチョウ、白いのがモンシロチョウ」と説明することができた。

M児宅に帰ると、母親が帰っておられる。M児は母親に「チョウチョが2匹とれた」と言っている。筆者が「M君、お母さんに、名前を教えてあげてよ」と言うと、M児は「黄色いのがモンキチョウ、白いのがモンシロチョウ」と説明した。母親は「よく知っちゃるね」と応答した。

さらに、M児は家の奥にいる父親にも「お父さあん、おじちゃんがモンシロチョウとモンキチョウを取ったよ」と玄関口から叫んだ。

以上のように、モンシロチョウとモンキチョウの区別を新しく知った直後、偶然にも3回も「モンシロチョウとモンキチョウの区別を練習することができたのであった。

翌4月18日（日曜）、11時40分、「お父さん、お母さん、散歩に行ってくるよ」というM児の出発の声を残して、M児と一緒にいつもの散歩に出かけることになった。

散歩コース入口に着くまでに、M児は「きのう、逃がしてやったよ」という。すなわち、昨日の散歩で捕獲したモンシロチョウとモンキチョウの2匹のチョウを逃がしてやったというのである。

すぐ目の前を1匹のモンシロチョウがゆっくりと上下しながら飛んでいる。M児は「きのうつかまえたモンシロチョウよね」と言う。その直後、茶色のチョウ（ツマグロヒョウモン）が飛ぶのを見て、次のような会話がつつく。

M児「なに、あれ。茶色のチョウチョじゃ。しいっ！」

筆者「なんというチョウチョかねえ」

M児「おじちゃん、名前知らんの？」

筆者「知らんのんよ」

M児「帰って調べてみようや」

目の前をツマグロヒョウモンが飛んでいくのだが、簡単に捕獲することはできない。この場面では、さらに散歩コースを歩くことになり、結果的に、この日にヒョウモンチョウを「昆虫図鑑」で調べることはできなかった。

少し進んだところでM児が「あっ、モンキチョウじゃ」と叫んだ。M児の指さす方向には、たしかにモンキチョウが飛んでいた。そこで昨日の出来事を思い出して、M児に尋ねてみた。

筆者「なぜモンキチョウなんかなあ」

M児「黄色い羽をしちよるからモンキチョウ！」

はっきりとした口調でと教えてくれた。モンシロチョウとモンキチョウの区分は、これで定着したようである。

この日、散歩道の入口では、薄紫のシジミチョウが4～5匹舞っていた。2匹が、もつれあうようにして飛んでいる。それを見たM児は「今日はシジミチョウ、ふたつ取ろうか」と口走った。すでにモンシロチョウとシジミチョウの区分はできていたのだが、M児にたずねてみた。

筆者「M君、どうしてシジミチョウというのを知ちよるの？」

M児「おじちゃん、さっき言ったじゃ」とのことであった。もちろんM児はこれ以前にシジミチョウを知っていたのだが、ついつい無意識に筆者が口にしていた言葉を、きちんと聞いていたのであった。

5月1日の散歩で、足もと近くを小刻みに移動しては止まるシジミチョウを見て、M児は「シジミチョウ。貝みたいなもの。あれがシジミ」と言う。シジミチョウという名前は貝のシジミと似ているからという意味合いである。誰かに教えてもらった知識であろう。

#### 8. 大人の中から見た散歩コース(1993.5.5)

1993年5月1日夜から5日早朝まで、M児一家は家族旅行で山口市には不在であった。しかし4日のちに散歩の機会があった。5月5日の午前6時40分、M児の一家が車で帰着したとき、M児は母親の腕の中で寝ていた。昼ごろには散歩もできるであろうと予想して、準備をした。1昨年M児が使いはじめた網は破損がひどく、昆虫類を捕るには柄も短いということもあって、筆者は朝のうちに捕虫用の網を購入しておいた。この日、M児と初めて捕虫専用の網を使うことになったのであった。

その日の午前中、M児が眠っている間に捕虫専用の網を持って、予め実地調査を試みた。いわば大人の中から見た散歩コースのチョウの調査である。10時30分より11時40分までのあいだ、池の土手の西側と南側の土手下を中心に、実際にチョウを捕獲しては、図鑑で調べてみた。以下に列挙したチョウは、70分のあいだに見つけた順番であり、括弧の中で若干の説明をした。

- ① ヒメウラナミジャノメ (ジャノメチョウは、これ1種であった)
- ② ヤマトシジミ (雄は薄紫色、雌は茶褐色。午後多くなる)
- ③ モンシロチョウ (数は多い)
- ④ スジグロシロチョウ (数は少ない)
- ⑤ アゲハ (午後多くなる)
- ⑥ ベニシジミ
- ⑦ ミズイロオナガシジミ (1匹のみ)
- ⑧ ツマグロヒョウモン (1匹は捕獲、もう1匹を見る)
- ⑨ モンキチョウ (2匹)



つぎのチョウは捕獲することはできなかったが、見かけたもの。

⑩ モンキチョウの雌（白い羽で、黄色はほとんど見えない）

⑪ クロアゲハ

この日まで、M児と筆者が「モンシロチョウ」と呼んできたチョウの中には、つぎの3種類が含まれている可能性があることが判明した。

- ・モンシロチョウ
- ・スジグロシロチョウ（黒っぽい筋が羽全体にあって、やや大きめ）
- ・モンキチョウの雌（羽の外側に黒の縁どりがある）

また、この日の捕獲しての観察によって、シジミチョウについては次の三種類がいることが判明した。

- ・ヤマトシジミ（おす。めすは茶褐色で、別種のように見える）
- ・ベニシジミ
- ・ミズイロオナガシジミ

とくにヤマトシジミとミズイロオナガシジミの区別は、実際に捕獲して観察しないと「分ける」ことはできない。

## 9. M児の造語「モンシロモンキチョウ」(1993.5.5)

1993年5月5日、拙宅から10mほど離れた散歩コースに入る前に、M児と筆者の目の前をモンシロチョウが飛んでいく。M児は、真新しい捕虫網を持って進む。M児は歩きながら「モンシロチョウを取ったあと、モンキチョウも取ろう。シジミチョウも取ろう」という。さらに「それから、謎のチョウチョも。黒っぽいのと茶色がまざるとるチョウチョも」と言った。

散歩の初めに、モンシロチョウ、モンキチョウ、シジミチョウの名前が正確に再現されたばかりではなくて、さらに「謎のチョウ」と「黒っぽいのと茶色が混ざるとるチョウチョ」など、合計5種類のチョウの名前が区分されていたのであった。それまでM児の語ってくれたところから、「謎のチョウ」の方は筆者には分からないが、黒と茶色のチョウとはツマグロヒョウモンのはずであった。

言葉で表現した5種類のチョウはM児の頭の中でイメージとして飛んでいるとはいえ、実際にM児が、目の前を舞い飛ぶチョウを捕獲することはできない。

筆者はさっそくM児の目の前でモンシロチョウを捕獲する。草の上に伏せた網の中に手を入れてチョウを取り出したM児が「羽がちょっと黄色いね、モンシロモンキチョウか ね、モンシロチョウにしとこうか」と言う。実際に指先に摘んでいる白いチョウを見ると「羽がちょっと黄色い」という事実におつかる。そこでモンシロチョウとモンキチョウの名前を合成して「モンシロモンキチョウ」という新しい名前を創出したのであった。このチョウは、後日、筆者が調べてみるとモンキチョウの雌なのであった。モンキチョウの雌は、白色の羽の表面にわずかに黄色が混じっているだけなので、モンシロチョウと同じように見えるのであった。

## 10. ツマグロヒョウモンを図鑑で調べる(1993.5.5)

さらにM児のいう「茶色と黒の混ざったチョウ」を捕獲したので、筆者宅に持ち帰って調べることになった。M児「おばちゃん、チョウチョの本、ない？」とインターホンに呼びかける。

M児は図鑑の「チョウのなかま」を開いてもらい、図鑑の絵を捜しはじめる。ふたりの大人も見守る。「茶色で、黒の点々がある」と言いながら探すが、ヒョウモンチョウの区分は大人でもむつかしい。筆者たち大人の手を借りて調べ、どうにか「これこれ!」ということになる。そのあと「ツマグロヒョウモン」という片仮名の文字を指さしながら1音ずつ読み、筆者は「ツマグロヒョウモン言うんよ」と教えた。「それ、つかまえようか。ずっと前、あそこにブンブン飛んじよったよ」と言う。以前に茶色のチョウとしてM児は何度も見かけているのである。

筆者宅の玄関を出たところで花に止まっているモンシロチョウに気付く。すぐに新しい網でモンシロチョウを取る練習をするが、獲物とネットの部分の距離を定めることができない。

散歩コース入口でM児が「シジミチョウ!」と叫んだので、筆者が捕獲する。M児は「食べる!」と言って、手に持ったシジミチョウを草に近づける。

## 11. アゲハを調べる(1993.5.5)

つぎに筆者はアゲハを捕ることができた。

M児「帰って、調べてみよう」

M児「こっちがわ、見せて!」

M児「これじゃ」といって図の絵を指さす。アゲハの場合は、ほかのアゲハチョウとの区別もはっきりとしており、調べるのが容易であった。

M児「これ、なんて書いてある?」

筆者「アゲハ」

M児「これ、おれ、見つけたことある」

M児「えんぴつ!」といって、鉛筆をうけとる。「丸しところ」といって、図鑑の「アゲハ」という文字を丸で囲む。

筆者「お母さんにも見せたら」

M児「お母さんにも見せようか」玄関を出る。

M児「お母さあん!」といったあと、すぐにM児が「羽がもげた。逃げた」と言う。

筆者「いいよ、いいよ。またとろうね」

M児「アゲハをもった手がツルツルする」

どうやらアゲハの鱗粉で手の指がスベスベするらしい。

虫籠に入れたモンシロチョウを見ながら、M児は「もう1匹つかまえようよ、さみしいから。もう2匹つかまえたら、仲良し三人組になる」と言う。さらに「葉っぱを入れとこう。あっ、逃げてしまった」という結果になってしまった。

## 12. ペニシジミを調べる(1993.5.5)

天候に恵まれたこと、そして新しい捕虫網を使うという条件にも恵まれて、チョウの捕獲

と図鑑調べに熱が入った。ベニシジミを捕ったときも、すぐにM児は「調べよう」と言い、拙宅への道を急いだ。

筆者「これかなあ」

M児「鉛筆は？ 丸をつけちょこう」

調べたベニシジミは玄関から逃がしてやることになる。

この直後、筆者はジャノメチョウ（ヒメウラナミジャノメ）をとる。

M「シジミチョウ？ なんだろうね。調べにいこう」

この時点で、M児にとってはジャノメチョウとシジミチョウは「分かれて」いない。勇んで調べに帰る途中で、M児、流れこみのところで足をふみはずしたらしく「わあん」と大きな声で泣く。腹を打ったらしい。ここで散歩は自動的に終了する。

5月11日の散歩で、M児はベニシジミを捕獲することができた。

コース①を歩く。M児は草の上を低く飛んでは止まるヒメウラナミジャノメを、なんとか捕ろうとするが、なかなかとれない。たしかに、ねらうチョウは、目の前の草の上を低く、しかもたびたび草に止まってくれるのだが、いかんせん細い溝を隔ててねらうのは、難しいのである。

M児はしきりに網を振り回している。しかし、コース①では、ねらうチョウを捕ることができなかった。

そのあともM児はしきりに網を振り回しては、チョウを追っている。

M児は「チョウチョ、つかまえた」と叫んだ。どうやら止まっていたチョウを、上からかぶせるようにして捕ったようで、よくみるとベニシジミであった。

家にかえって、調べてみることにした。

M児「おばちゃん！ めずらしいチョウチョ！」と、玄関先から、奥にいる「おばちゃん」を呼ぶ。これは「チョウチョの絵本」を持ってきてくれとの意味でもある。

「よく捕ったねえ。じょうずじゃねえ」とおばちゃん。

M児は「止まっちゃったけえ」と説明する。

図鑑を開いてやって、「これ、ベニシジミよ」と絵の下に書いてある片仮名を読んでやる。どうにか「ベニシジミ」であることをわかったようだ。それにしても「ベニシジミ」という名前は子どもにはむつかしい。

しかし、手から離れたベニシジミを見て、「ベニシジミ、歩いてる」、「おお、歩いてる」、「おお、飛んだ、飛んだ」といつている。そのあと、玄関の戸をあけて逃がしてやる。

再び散歩コースに向かう。池の排水溝の近くで、M児は2匹目のベニシジミを捕まえたが、すぐに逃がしてやる。

最後にM児が捕ったベニシジミと、図鑑を持ってM児宅に行き、この日の散歩でM児が自分の力で「ベニシジミ」が捕ったことを母親に伝える。結局、この日M児はベニシジミを3匹とったことになる。この日の夜19時30分、すでに暗くなっていたが、インターホンが鳴ってM児が来る。

M児は「いま帰った」と言いながら玄関に入り、筆者と玄関の上がり口で話す。

M児は「今日、3匹チョウチョとったね」と言う。どうやら、昼間、自分の力で捕った

チョウのことが忘れられないようである。

筆者は「どういう名前じゃったかね」とたずねてみた。思い出せないようだったので「赤かったね」と付け加えた。M児は「アカシジミ?」という。筆者は「ベニシジミね」とだけ言っておいた。

この日、マー君にとって「チョウチョ」の中から「ベニシジミ」が分化した。文字どおり「チョウチョ」という大きな枠組の中から「ベニシジミ」が分かれたのである。「分ける」ことのできたマー君は、「分かる」ことができはじめたのである。

5月12日、7時40分より、筆者ひとりで散歩コースのチョウを探してみる。池南側の土手下では、茶色をしたヒメウラジャノメが多い。この土手下では、すぐに10匹ちかくを数えることができた。つぎに多いのは、ヒメジャノメであった。3匹ほど見つけることができた。早朝でもいるということは、どうやらヒメウラジャノメとヒメジャノメは、この土手の草むらで夜をすごすようである。そのほかのチョウは見あたらない。

5月14日、18時42分、インターホンが鳴り、M児の声がする。母親によれば、車から降りてそのまま桑原宅のインターホンに向かったとのことであった。散歩の出がけにM児は「きょうはチョウチョ、おるかねえ」という。

ひとしきり散歩を楽しんだあとで、土手をくだっていると、1匹のチョウが飛んだ。この日の気温は低いので、これが唯一のチョウであった。M児は「シジミチョウのなかま!」という。そのあとすぐに「アカシジミ」と言い、すぐに「ベニシジミ」と訂正した。どうやら、マー君の内部で、「シジミチョウ」と「ベニシジミ」が分化したようである。

私の方は、そこまで理解されているとは予想していなかったので「よう思いだしたねえ」と対応した。

### 13. 「謎のチョウ」(1993.5.6)

5月6日、13時35分、帰宅したばかりのM児が拙宅玄関前のバンジーに止まっている「謎のチョウ」を見つける。ツマグロヒョウモンである。M児は「あっ、うしろに模様がある」と言う。そのあとにも、もう1匹飛んでくる。1993年の春から夏にかけてはツマグロヒョウモンの数が例年に比べて多い。

M児が、拙宅前の家を見て「様子が変わった」と教えてくれる。垣根のカイズカイブキが剪定されていたのである。そんな話をしているときM児は「それより、謎のチョウがいる」と叫んだ。M児の指さす方向を見るとクロアゲハであった。これまで「謎のチョウ」という言葉は不明であったが、この日クロアゲハを指していることが判明した。

この日の散歩でM児はベニシジミをねらったが捕獲することはできなかった。

### 14. 「目玉シジミ、目玉チョウ」(1993.5.15)

5月15日、M児と散歩に行こうとして玄関を出る。玄関先で、ヒョウモンチョウが飛んでいくのを見かける。目の前のセメントのうえに止まる。さっそく網を動かすが、逃げる。そのあとすぐにモンシロチョウが飛んでいく。

M児は、「コースはこっち」といって、流れ込みのそばを上る。M児は水の中に入って楽しんでいる。その間に、近くを飛んでいたモンシロチョウを取ると、すぐにM児は「モンシ

ロチョウじゃない」という。「ただのモンシロチョウではないか」という意味である。もう珍しくない様子なので、すぐに逃がしてやる。

M児は、自分で網を持ちチョウを狙いはじめた。散歩道の溝のそばでチョウをねらっていたM児は、足を開いて溝の上にまたがった姿勢で捕虫網を振りまわしている。これも初めてである。なかなか狙いが定まらない。

筆者がベニシジミを捕獲したので、M児に「なにかなあ」と見せると、「シジミチョウのなかま」と答える。さらに「クロシジミじゃないよねえ」という。「アカシジミか」と言ったあと、すぐに思いついたらしく「あっ、ベニシジミか」という。

散歩コース①終点を過ぎて、草原に出るとジャノメチョウがたくさんいたのでとって見せる。取るまえには、白っぽく見えたのだろうか、「モンシロチョウよ」と言う。網の中に手を入れてとって見たM児は「メダマシジミ？ 目玉みたいのがある」と口ばしる。M児が「逃がそうか、名前を調べんと」というので、「いいよ」と答える。さらにもう1匹とれたのでみせると「同じじゃあや」とのこと。

散歩コース入り口に引き返したとき、ヒョウモンチョウが飛んでいるのが見える。この日の散歩初めに飛んでいたチョウである。

M児「ベニシジミのお父さんじゃない？ベニシジミと似とったじゃろう、おじちゃん」

M児「さっきつかまえた目玉のあるシジミ、メダマシジミ」

アオスジアゲハが横切る。(M児は気付かない)

池の土手下でヒョウモンチョウを取る。マー君のいう「ベニシジミのおとうさん」である。

M児のいう「秘密基地」へ上がる。水田よりも1mばかり高いところに延びるセメント道のことである。目の下に広がる水田を見てM児が「モンシロチョウがいっぱいじゃね」という。

いつもニワトリの見学をする家を出たところで、ヒョウモンチョウが止まっている。筆者が捕獲すると、M児は「ベニシジミのお母さんじゃ」と言って、網の中のチョウをつかまえて逃がしてくれる。

もう1匹、ジャノメチョウが取れる。それを見てM児は「メダマシジミ。おれが考えた名前のシジミ」という。ジャノメチョウの「蛇の目」を「目玉」という言葉で表現した。すぐ目の前を黄色のチョウが飛んでいく。捕まえようとするが、飛ぶのがはやい。M児が気付いて「モンキチョウ!」と言う。捕まえることはできなかった。

捕虫網を玄関にしまってもらって、散歩を終える。いつものように「バイバイ」をしたのは12時8分であった。

## 15. 目玉チョウがジャノメチョウになる(1993.5.16)

1993年5月16日、M児は家の人たちと、キウリと花の苗を植えているところであった。M児たちがキウリを2本植えるあいだ、まわりを眺めていると、いろいろなチョウが、入れかわりして飛ぶので名前を書きとめてみた。14時52分から15時2分までの10分間の観察である。クロアゲハ、ヒメウラナミジャノメ、ツマグロヒョウモン、アゲハ、ヤマトシジミの5種類であった。

散歩コース入り口までの道でM児が「珍しいチョウ」のことを話してくれた。M児が「保育園に、珍しいチョウチョがおった。まんなかが水色で、あとが黒色のチョウチョ。珍しいじゃろう」と教えてくれる。「散歩でね」とつけくわえた。

散歩道にでたところで、ヒメウラジャノメがしきりに飛んでいる。

M児「黒いチョウチョ！」

筆者「どこ？」

M児「あそこ！」

2匹ほどいたが、M児に教えられたほうを捕る。網の中のチョウを取って見て、

M児「黒いチョウチョじゃなかった」

M児「はくの改造した名前じゃったら、メダマシジミ（目玉しじみ）」と言う。先日来、M児が言っている名前である。捕ったあとで逃がす。

そのあと、目の前でベニシジミが草の先にとまっている。

M児「ベニシジミ」という。

これも、網でとって、見る。

M児「なんでメダマチョウ（目玉チョウ）いうかいうと、目玉がついちよるから、メダマチョウと言うそ（言うの）。ほんとうは何ていうの？ 名前はなん？ ねえ、おじちゃん、ほんとうは何というん？」

M児は「つかまえて！ もう1回」といったあと、すぐにつづけて「モンキチョウは羽が黄色いからモンキチョウ。クロシジミは体ぜんたい黒いから、だからクロシジミというそ」と言う。

コース①終点までの道をしばらく探したあと、マー君のいう「メダマシジミ」をつかまえて、図鑑で調べるために走って拙宅まで帰る。

玄関先では、前日と同じように、口で「ピンポン」という。玄関から家の奥へむかって、M児が「チョウチョの名前！」と叫ぶ。M児のいう「おばちゃん」は「本？」とあって、昆虫図鑑を持ってきてくれる。

M児は、筆者が手に持っていた「目玉シジミ」の羽を見て「目玉」という言葉を3回言った。それも私には「目玉。目玉、目玉」というように、前の1回と、後の2回を区切ったように聞こえた。というのは、その「メダマシジミ」の、上の羽には「目玉が1個」ついていて、下の羽には「目玉が2個」ついてたからである。M児は「このページじゃないようなね」と言いながら、めくっている。「ジャノメチョウの仲間」のページを開いてやると、マー君は「あっ、これ！」と指さす。

じつは、マー君が指さしたのはヒメジャノメで、大人の私も、最初のうちはそれだと思っていたのである。しかも、そのヒメジャノメは、それから1年8か月も前に、マー君がはじめて自分の力でとったチョウでもあった。その日に捕ったヒメウラジャノメとヒメジャノメのちがいは、目玉が上の羽に2個ついているか、下に2個ついているかの違いである。M児がまちがっても仕方のない同じ仲間のチョウなのである。その証拠に、どちらにも「ヒメジャノメ」の言葉が付いていて、「ウラナミ」が付くわわっているところだけがちがうのである。

そこで、私は、さきほどM児が「目玉。目玉、目玉。」といったことを思い出して「目玉

がひとつ」と、「上の羽に目玉がひとつあったよ」のつもりで言った。するとM児は「(目玉が) 3個に・・・」といて、同じページのふたつ下のチョウを指さして「あっ、これ、同じじゃ」と叫んだ。そのあと、カタカナで書かれている「ヒメウラジャノメ」の名前を読んでやった。

このたびも、まだ裏の畑におられた母親に見せにいくことになった。M児が図鑑をもって、筆者がヒメウラナミジャノメをもって行く。母親も感心しておられた。そばにおられた父親にも見せた。すると父親は「ジャノメチョウじゃ」、つづけて「ジャノメというのは蛇の目」と言われた。

ということはM児がジャノメちょうを見て「メダマチョウ」となづけたことは、じつに対象の本質を見抜いた素晴らしい感じ方なのである。筆者は「そうそう、ジャノメというのは蛇の目なんよ」と言うておく。

たしかに正式の名前はヒメウラジャノメであるが、さすがに難しいので「ジャノメチョウ」ということにしておく。

M児が「モンシロチョウ」と言って、2匹飛んでいるモンシロチョウを指さす。散歩コース入り口の目の前で、ベニシジミが草の先にとまっている。筆者が「チョウチョがいるよ」と指さすと、M児は「ベニシジミ」という。M児はすぐに網で捕る。捕ったあと「チョウチョをつかまえたのは、これで4回目」という。

そのあと、ヒメウラナミジャノメがいたので、取る。するとM児が「あれ、ジャノメじゃ」という。

目の前をツマグロヒョウモンチョウが飛んでいく。かつてのM児の「謎のチョウ」のひとつである。

筆者

「これは、ヒョウモンチョウよ」

M児「ヒョウモンかあ」

帰りの田んぼの土手の草の回りで、1匹のモンキチョウが舞っている。M児は「モンキチョウじゃ、久しぶりに合った」という。

## 16. アオスジアゲハ(1993.9.26)

M児とマユタテアカネを図鑑で調べたあと、再び散歩コースを歩いていると、いつもは目にも止まらないようなスピードで駆け抜けるアオスジアゲハが、ゆっくりと通り過ぎて草むらを舞っている。あとで録音を聞いてみると、筆者は思わず「珍しいチョウチョがおった」とM児に声をひそめて言っている。

筆者がアオスジアゲハを「珍しいチョウチョ」と言ったことには理由がある。というのは5月16日の散歩のときにM児が「珍しいチョウチョ」の話をしてくれたからである。そのときの記録によれば、M児は「保育園に、珍しいチョウチョがおった。まんなが水色で、あとが黒色のチョウチョ。珍しいじゃろう」と言った。この近辺で「まんなが水色で、あとが黒色のチョウチョ」とは、ほぼアオスジアゲハと想定して間違いない。

記録によれば、5月11日の散歩のときに、散歩コース①の終点でM児とチョウをとっていると、目にも留まらぬ速さでアオスジアゲハが北から南の方角へ飛んでいった。M児が気づくことはないであろうと思って、話題にはしなかった。5月15日(土曜)の午後3時20

分すぎ、自宅とバイパスの、ほぼ中間地点で目撃している。この日、筆者の車のエンジンの始動音を聞きつけて、M児が家の中から出て来て見送ってくれた。また、1991年の7月20日と30日に目撃している。

アオスジアゲハは、大人の筆者にとっても「珍しいチョウ」であり、かつての昆虫採集の中で一度捕獲しただけである。筆者のアオスジアゲハの思いでは、いつも天空高く舞っていて、地上に止まることのないチョウなのであった。

いったん取り逃がしたのだが、飛び去る方向を視線で追いかけると途中で再び止まった気配である。M児が盛んにヒガンバナの茎を細い棒で切り倒している間に、散歩コース①の終点の草むらに止まっていたアオスジアゲハを捕獲することができた。このとき筆者は網の中の獲物をM児に見せながら「これ、すごい珍しいチョウチョ」と言っている。直前に図鑑でマユタテアカネを調べているので、拙宅に引き返して「珍しいチョウチョ」も調べてみることにした。

M児は、目次を見ながら「6ページ」と言う。このころM児は、目次とページをみることを覚えていた。「あっ、6ページあった。ここ」と言いながら「チョウのなかま」の最初の「アゲハチョウ」のページを見ていく。

M児「なんか、これに似とるようなね」

筆者「これよ、ねえ、おばちゃん。青がすごいきれいじゃろう」

M児「これ？ 何？」（図鑑の片仮名が読めない）

筆者「ア・オ・ス・ジ・ア・ゲ・ハ」と1音ずつ切りながら読む。

M児「なんか、聞いたことあるわ。……聞いたことあるけど」

筆者「あっ、反対側は赤もあるね」

M「ちょっと、裏、見てみるか」と言ってヒヨウモンチョウやジャノメチョウの仲間などのページに「おもて」あるいは「うら」などの表示があるのを思い出したらしく、「うら」を調べようとしたのだが、アオスジアゲハの「うら」は記載されていない。M児は「裏、ないわ」と言った。

家の人にも見せることにした。M児は「すごいチョウが捕れたあ」と玄関で叫ぶ。

母親「あっ、きれいなよ、お兄ちゃん来てごらん、ブルーのよ」

筆者は、玄関に出てきた「どういうチョウチョか知っとる？」と言いながら、小4のH君にチョウを見せた。

H君「うわあ、ぶち（「すごく」の意）きれい！」と言う間に、M児が「ええとね、アオスジアゲハ」と言った。

アオスジアゲハは、すでに捕獲したときから羽が破損していた。観察したあと、すぐに逃がすことにした。M児、筆者、母親、小2の兄H君の4人が見守る中、アオスジアゲハは飛んで行った。

この日、ちょうど100日前にM児が「まんなかが水色で、あとが黒色」の「珍しいチョウチョ」と言っていたものが、アオスジアゲハであることが判明した。

そのあと母親が茶色のチョウについて話題にした。M児が「ヒヨウモンチョウ」という名前を覚えてくれたのだと言う。



## 17. 最近の散歩の中のチョウ(1993.11.3)

1993年11月3日の10時半、歌うようなリズムでM児の「ザリガニ、逃いがそう」という声が拙宅の玄関に響いた。3日前の10月31日の散歩のときに一緒に捕まえたザリガニを、これまた一緒に、池に逃がしてやろうとの誘いである。

11時2分、M児が「ねえ、おじちゃん、何かして遊ぼうか」と言う。筆者が「そしたらチョウチョ取りに行ってみるか」というと、M児は「うん」と答える。そう言い残して、M児は自分の家に入っていく。しばらくして出てくるが、肩から虫かごを下げています。筆者が拙宅から持って来た虫取網をM児の手に渡す。

入口の草むらをモンキチョウが飛んでいる。M児の「モンキチョウ捕って！」の声に筆者が捕獲して、すぐに草の上に伏せる。M児が網の中から取り出して、虫かごの中に入れようとするが、逃げてしまう。

けれども、もう1匹のモンキチョウが3メートルばかり離れたところを飛んでいるので、筆者が網を振り回して捕まえることになる。2匹目は上手に虫かごの中に入れる。

虫かごにモンキチョウを入れたあと、M児が次のようなことを言う。

M児「アゲハチョウ取って、こんどは。モンシロチョウがおらんね、このごろ。あつ、あの遠くに大きなチョウ、アゲハチョウが！」と大きな声で教えてくれる。M児の指さす方向を見ると、稲刈りのすんだ田んぼの上を茶色のチョウが飛んでいく。この夏から秋にかけて、とくに多く見られたツマグロヒョウモンらしい。

さらに畦道を進んでいくとき、ほんの2、3メートル先を、小さなシジミチョウが舞っているが、M児は気づいていない様子である。

モンシロチョウも1匹、遠くを飛んでいく。

小春日和の暖かさの中で、蝶の種類も多い。蝶の観察をする今年最後のチャンスかもしれないと思いながら散歩道を進んでいた。ところが散歩コース①の終点に体長21cmのクサガメを発見することになり、最初のチョウチョ取りは中断することになった。

カメ騒動が納まったあと、散歩を再開する。アゲハが飛んでいくのが見える。さらに、田んぼの石垣にはベニシジミが止まった。帰り道、M児の目の前をモンシロチョウが飛んでいく。M児「止まるのを待とう！」と言うが、モンシロチョウは土手を越えていく。

足もと近くの草の上を灰色のシジミチョウ（正確にはヤマトシジミ）が駆け回るように舞う。

筆者「これ、なにかね」

M児「シジミチョウ！」

その直後、茶色のチョウ（ツマグロヒョウモン）がM児の目の前のエノコログサの先に止まる。筆者が「M君！」と小さな声で指さすと、M君は用心深く網を近づけて取った。私の知っているかぎり、M児が初めてヒメジャノメ、ベニシジミなどを自分の力で取って以来の「大物チョウ」である。獲物を網の中に入れて持って帰ることにした。

拙宅に帰ると、M「おばちゃん、チョウの凶鑑！」と叫ぶ。凶鑑を待ちながら、M児は「アゲハチョウ？」とも言う。調べると、ツマグロヒョウモンのメスであった。

筆者「ツ・マ・グ・ロ・ヒョウ・モン、言ってごらん」

M児「ツマグロヒョウモン！ 羽がもげた。逃がすよ」

いったん玄関の中に放たれたツマグロヒョウモンを、再び捕まえて玄関の外に逃がしてやる。

この日の散歩で、M児が言葉に出したチョウの名称を次にまとめておこう。

モンキチョウ、アゲハチョウ（アゲハ）、モンシロチョウ、ベニシジミ、シジミチョウ（ヤマトシジミ）、ツマグロヒョウモンの6種類であった。

## 18. 「わかる」の構造（まとめにかえて）

「ひとつのもの」だと思い込んでいたものを「分けること」により、「わかる」過程をたどるということは、子どもに限ったことではない。それは、大人にも当てはまることなのである。つまり「わかる」とは、もともと「分かる・別る・判る・解る」であり、目の前に据えた対象そのものを要素にまで「分ける」ことから出発するのである。

「分けること」がもっとも日常的な「わかること」なのである。たとえば、道具や機械を「分解する」といえば、なんらかの「物」を要素（部品）に分けることである。また物事を「判別する」といえば、混乱している事物に筋道をつけて理（ことわり＝事分り）をつけることである。「分別がある」といえば、単に物事の世界の理（事分り）を心得ているばかりだけではなくて、人間関係や情の世界をも「訳知る＝分け知る」ことができなくてはならないのである。このように日本語の「わかる」には、物ばかりではなくて、事をも「分解し、判別し、分別すること」が含まれているのである。

新しい物事が「わかる」については、次の三重の「分ける」という意味がふくまれている。それは、「対象を他のものと分け、対象とわかろうとする主体とを分け、対象そのものを分ける」(5)ことである。そのことを「チョウがわかる」過程にあてはめると次のようになる。

チョウが「わかる」というときの第1の「分ける」とは、現実には飛び回っているチョウという物を実在世界のたくさんの物の中から「分け取る」ことである。

そして次に、「わかる」対象としてのチョウを目の前に据えること(forstanden=understand)により対象化することになる。自分が握っている(gripe)チョウを、目の前に据えて、あたかもわかろうとする私に向かってくる(gegen)ように、しっかりと据えたもの(Stand)を、厳密な意味において対象(Gegenstand)と表現するのである。わかるためには手で掴む(greifen)ことが出発点であり、把握されたもの(Begriff)こそが知識であり概念なのである

そのあと、わかりたいと目の前に据えた対象物を要素にまで細分化して、既知の要素と置換し類推することによって「わかる」のである。(6)

以上のことを、M児がチョウを理解する場面に当てはめれば次のようになる。

- ①最初のうちは筆者が、そして時には自分の力で捕虫網をつかって散歩道を飛んでいるチョウを捕獲する（分け取る）。
- ②網で捕獲したチョウを、文字通り自分の手で掴み（把握し）、目の前に据える。
- ③そのあと目の前のチョウの羽の色や模様、大きさなどの要素に分けながら、最初のうち「チョウチョ」という名称だけで表現していた物を「分けた」結果、様々な種類のチョウが分化し、「わかって」いくのである。

幼児がチョウを捕獲し、自分の手で掴み、色や形という要素に分けることは、じつはチョ

ウを「理解すること」そのものなのである。

それでは、大人の「わかる」は、どのような構造を持っているのであろうか。筆者は理科の専門でもなく、チョウの専門家でもない。しかしながらM児との散歩の中で、徐々にではあるが散歩コースのチョウについては、以前よりも「わかり方」が詳しくなってきた。その過程は、原則としてM児の「わかり方」と同じである。

つぎに筆者自身がジャノメチョウとシジミチョウについて「わかる」ようになったプロセスをふりかえってみる。

M児が初めて網でチョウをとったのは1991年8月31日のことであった。その日は、網を使い始めておよそ2か月が経過した日でもあった。1匹の焦げ茶色のチョウをつかまえたM児は「ほく、チョウチョとりの名人になった」と喜んだ。しかし、この時点では、周囲にいるさまざまなチョウは、すべて「チョウチョ」という一言で片づけられていた。羽が広くて、ひらひらと飛ぶもののすべてが「チョウチョ」であった。当時はそれで十分なのであった。

M児が、はじめて自分の網で取ったチョウは、小形の焦げ茶色のチョウであった。筆者としてはモンシロチョウやアゲハなどのチョウとは別の物として分けて、ジャノメチョウであると分けることができ、「わかった」つもりであった。

それから1年8か月後の1993年4月末、いつものように散歩コースを歩いてみた。すると、たくさんのジャノメチョウが舞っていた。それにしても、それまで見たジャノメチョウよりは形が小さい。なぜかなという疑問が走った。ひょっとしたらジャノメチョウには固体差があって大きさが違うものがあるのではあろうか、あるいは季節によって大小があるのではあろうかなどと考えた。

そこで見覚えのある、目の前で飛んでいるジャノメチョウの羽の模様を覚えて家にかえった。手元の昆虫図鑑を調べてみると、筆者がそれまで「ジャノメチョウ」と称していたものは正確には「ヒメジャノメ」であり、新たに見かけることになった小型のジャノメは「ヒメウラナミジャノメ」であった。たしかに「ヒメジャノメ」が体調55ミリとあるのに対して、「ヒメウラナミジャノメ」は40ミリとやや小さいのであった。これで「ヒメウラナミジャノメ」の存在と名称を確かめることができた。

このような過程をへて、はじめのうちに私にとっては単なる「ジャノメチョウ」であったものが、このたび初めて「ヒメジャノメ」と「ヒメウラナミジャノメ」に「分けられて」、正確な名称が「わかった」のであった。

M児が筆者と同じように2種類の「ジャノメチョウ」を、すぐに区分して「わかる」ということはありえない。しかしながら、「ジャノメチョウ」の分別の方法は、M児が最初に用いた「チョウチョ」という言葉をモンシロチョウやシジミチョウやモンキチョウに区分していった過程と本質的には同じなのである。

この間の事情は筆者のシジミチョウの理解にも当てはまる。シジミチョウは、M児との散歩道ではポピュラーな小形の蝶であった。このチョウについても、筆者は当然のように灰紫の小さなチョウがシジミチョウだと思っていた。しかし、もしやとも思い、シジミチョウについても調べてみた。

なぜシジミチョウというのか。そのころ考えたことは、まず形が小さいこと、その形が

「しじみ」に似ていること、そしてもうひとつ、あの薄紫の色が、蜆しじみの貝殻の内側の色によく似ているということであった。国語辞典によれば、シジミチョウの名称の由来について「蜆の殻の内面に似ている所からいう」（広辞苑）とあり、事典では「小さなシジミ（貝）が開いたような感じ」なのでその名の由来があると書かれたものもある。ほかの国語辞典の「しじみちょう」の項には「蜆蝶・小灰蝶」という漢字が当てられ、「一般に小形で、色彩の美しいものが多く、羽の形も変化に富む」（大辞林）とある。このシジミチョウの種類は「世界には約5500種、日本には75種を産する」(7)ということである。

これまで筆者とM児のあいだで使ってきた「シジミチョウ」とは、「シジミチョウ科」のチョウの総称である。目の前を飛んでいる灰紫の小蝶をシジミチョウといっても間違いではない。しかし、その時点では、まだ「シジミチョウ科」を分けていないのである。つまり、文字どおり「わかっていなかった」のである。

1993年4月14日、M児といっしょに「茶色のチョウチョ」を調べてみるようになった。たしかに遠くから見ると「茶色」ではあるが、花にとまったとき羽を広げているのを見ると、朱色であり、橙色なのである。さっそく図鑑を調べてみた。

どうやら、これが「ベニシジミ」の春型ということであった。この時点で、たんにシジミチョウと理解していたものが、じつは「ヤマトシジミ」であることがわかったし、あの「茶色の蝶々」が、じつは「ベニシジミ」であることがわかった。

さらに、この「シジミチョウ」には、たくさんの種類がある。これまでに自分でみたシジミチョウを思い起こしてみると「ルリシジミ」や「ヒメシジミ」などは、これまでに見ているように感じた。

これ以上シジミチョウのことを知ろうと思えば、目の前の散歩コースで飛び回っているシジミチョウを実際に捕まえて（分けとって）、目の前に据えて（対象化して）、色や形や大きさなどの要素に分けて調べなくては「分からない」ようである。

これまで、M児とチョウとの出会いの具体的場面を詳述してきたが、最初の「チョウチョ」が、いつ、どのような名称に分化してきたかを、以下にまとめておく。ただし鍵各個内はM児の言葉である。

年	月日	事	項
1991.	5. 24	散歩始まり、 <u>M児3歳7か月</u>	
	7. 3	散歩の用具としての網が加わる	
		この日以降、M児、散歩の中でモンシロチョウ、ヒメジャノメ、ヤマトシジミ、アゲハ等のチョウに触れる	
	8. 31	「はく、チョウチョとった」（ジャノメチョウ）	
	9. 30	「変わったチョウチョ」（ツマグロヒョウモン）	
1992.	4. 19	「あつ、チョウチョ、チョウチョ」	
	8. 26	「黄色いあれ」（モンキチョウ）、 <u>M児4歳11か月</u>	
		「シジミチョウ」（ヤマトシジミ）	
1993.	3. 21	「モンシロチョウ」	
	4. 17	「黄色いのがモンキチョウ、白いのがモンシロチョウ」	

4. 18 「茶色のチョウチョじゃ、名前知らんの？」
5. 5 「モンシロモンキチョウ」M児の造語、黄色の少ないモンキチョウの雌  
「ツマグロヒョウモン」  
「アゲハ」  
「ベニシジミ」
5. 6 「謎のチョウ」(クロアゲハ)
5. 15 「目玉シジミ」(ジャノメチョウ)  
「目玉チョウ」→「ジャノメチョウ」
5. 16 保育園の散歩で見た「珍しいチョウチョ」の話(アオスジアゲハ)
9. 26 「アオスジアゲハ」、M児6歳0か月
11. 3 「モンキチョウ、アゲハチョウ、モンシロチョウ、ベニシジミ、シジミチョウ」、再び「ツマグロヒョウモン」を調べる
- 

(注)

- (1) M児との散歩については、すでに以下のところで論述している。  
拙論「幼児と自然環境との関わり—身近な散歩コースにおける3才児と自然との出会い—」山口大学教育学部論叢第41巻第3部、1992、255-272頁-ジ。  
拙論「幼児の散歩活動で育つ力—身近な散歩コースにおける3才児の実態から—」山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第3号(1992.3)、133-144頁-ジ。  
拙論「マー君の散歩道」山陰中央新報、1992年(平成4年)7月14日より1993年(平成5年)2月9日までの計30回連載。
- (2) 拙論「世界を捕獲する道具」、連載「マー君の散歩道・第7回」山陰中央新報、1992年(平成4年)8月25日付。
- (3) 深谷昌次監修「学研の図鑑 昆虫」学習研究社、1970、12頁-ジ。
- (4) 同上書、75頁-ジ。
- (5) 坂本賢三著「「分ける」こと「わかる」こと」、講談社、昭和57年、53頁-ジ。
- (6) 同上書、52頁-ジ。
- (7) 「自然大博物館」小学館、1992年、564頁-ジ。